

A-107 近世社会における食生活構造の地域性と
その変動過程について (第2報)

和洋女大教育 石川松太郎
東教大付坂戸高 ○佐久間尚子

1. 表記の課題について、第1報(昨年度の大会で発表)では、近世社会は、交通運輸の発達等に伴って全国的な流通をとげた食品食物と、土産品として地域地域に独自の生産性、消費性を示す食品食物との分化が顕著になる点を明らかにした。今回は、食物史上のこうした事実をさらに掘り下げて、近世後期、封建制度という強固な軛が徐々に崩壊していく中で、食生活の内容がどのような変化を遂げえたか、また食生活に対する人々の意識や期待がいかに変動したかについて、実証的な分析を行なう。

2. 近世初期から中期にかけて作成された和歌食物本草のうち、1630年刊、1642年刊、1667年刊、1694年刊の4冊をとりあげ、そこに収められている食品食物(特に野菜、果物類)をひろいあげてひとつひとつ分析し、その時代時代にどのように取りあつかわれているかを検討した。また地域の特産物については、「日本往来」、「諸国名物往来」、「皇国産物往来」に収録されている食品食物を分析することによって明らかにした。

3. 以上のような研究操作を経た結果、近世、とりわけ後半の社会変動期において、野菜果物等を中心に全国的な流通をとげた食品食物、地域に独自のそれ、そして、両者の関連について、食物史上、重要な諸事実、ならびに今日に通じる問題点を発見しえた。